

高齢者の余暇活動について(3)

－高齢者における類型化と高齢者に対する

レクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究－

○上野 幸、山崎 律子、高橋和敏(余暇問題研究所)

キーワード：高齢者、余暇活動、レクリエーション、レクリエーション援助

●はじめに

本研究は第29回(1999)大会での「高齢者A氏・B氏の余暇活動について」と第30回(2000)大会時に発表した「高齢者C氏・D氏の余暇活動について－高齢者における類型化と高齢者に対するレクリエーション援助方法の確立に向けての事例研究(2)－」の第3報である。

平成12年4月より介護保険がスタートし、40歳以上は保険料徴収が始まった。65歳以上は同年10月から半額徴収が始まり、今年13年10月から全額徴収となった。しかし、高齢化がどんなに進展しても、和田秀樹(「明るい高齢社会への処方箋」PHP研究所、2001)や金子 勇(生きがい研究2号：長寿社会開発センター、1998)は、65歳以上の高齢者の8割が要介護でも要支援でもない元気な高齢者であると指摘する。介護保険を利用する率も低い。ただし、あと2割の介護の必要な高齢者に対しても大きな個人差がありながら、ひとくくりにして対処されている懸念がある。一人一人がより良く生きる為のレクリエーション援助は介護や医療の現場では益々必要となってくる。その為には個々の歴史性と地域性の理解が重要であると思われる。このような観点から高齢者へのレクリエーション援助方法の確立に向けて、本研究は個々の生のデータを収集し蓄積することを継続している。

●目的

今回の報告は、最終研究目的達成のために、その第一段階として、健常者各氏の生活での考え方、余暇活動の志向と実践状況を把握し、事例として累積することと中間報告として、これまでの事例の中での共通な特徴の割り出しを目的とした。

●対象と方法

対象者：1) E氏(男性)、2) F氏(女性)、3) G氏(男性)、4) H氏(女性)、
5) I氏(男性)の5名で65歳から69歳までに限定した。

面接日：平成13年4月から8月

面接者：上野 幸、山崎律子

●結果と考察

E氏の場合

年齢：69歳 昭和6(1931)年生まれ 性別：男性 出生地：台湾

現況：・東京都在住 妻と89歳の母と同居。

- ・平成6(1994)年 62歳で会社勤務を退職(平成4年より関連会社勤務)
- ・平成11(1999)年、2級ホームヘルパー資格を取得し、平成12(2000)年デイサービスセンターを運営するNPO法人の副理事長、副施設長に就任。
- ・趣味はビデオ編集。

人生経歴：父親の仕事関係のため3歳から15歳まで台湾で生活する。6歳の時に母が亡くなり、後妻に母の実妹がくる。昭和31(1956)年大学卒業後、金融機関に就職。昭和37(1962)年29歳で結婚し、昭和40(1965)年、長男誕生。スキーや山歩きはよくやっていた。昭和44(1969)年、38歳で支店長に就任。平成元年(58歳)喘息で救急病院に入院する。平成2年(59歳)、車の運転が好きで、移送サービスのボランティア団体に加盟する。平成3(1991)年、60歳で定年。大学時代から始めていたビデオカメラの撮影や編集などを定年後再開する。

信条：

- ・戦前は国のために死ぬのだと思っていた。
- ・救急で入院して死ぬ思いをしてからは、がちがちやらなくなった。
- ・人から感謝のことは聞きたいためにボランティア活動をしている。

考察：

- ・戦争と母の死が人生の中でも重大な事として心に残っている。
- ・楽天的に考えようと努力している。
- ・仕事はに対しては、とてもまじめである。

F氏の場合

年齢：68歳 昭和8(1933)年生まれ 性別：女性 出生地：九州

現況：

- ・多摩市在住 夫と息子の3人暮らし 専業主婦
- ・平成10(1998)年頃に顔面神経痛の症状がでて、その後2回手術をする。
- ・2年前から海外旅行に年1～2回友人と行っている。

人生経歴：昭和11(1936)年、3歳の時から満州に住む。食料も適当にあり、自由に遊んでいた。昭和18(1923)年、父が結核にかかり帰国した後、見舞う為に九州へ一時帰国する。その後満州にもどれず、そのまま日本で終戦を迎える。昭和22(1927)年14歳の時、父亡くなる。昭和30(1955)年、妹と祖父母の住む東京へ上京、就職。昭和34年、26歳で結婚、そのまま仕事を続け、昭和36年長男の出産で退職する。昭和39～42年夫の転勤で渡米、昭和43～45年にカナダに住む。渡米中は日本人会でのコーラス、料理、手芸などの活動やピアノなどの教室に参加。その後多摩市に住む。水泳教室に9年、健康体操教室に14年通う。満州時代のように、現在の家でピアノを再開しようと思っている。

信条：

- ・子どもの時から母に「あなたは不器用だ」とよく言われた。
- ・生徒として学ぶことはいいけれど、あまり積極性はない。
- ・水泳以外は続けられるような短期間のものを選んでいく。

考察：

- ・運動をはじめ趣味活動に積極的に参加し、適当にこなしているが、親から不器用と言われていたため、逆の発言が多い。
- ・とてもまじめで、芯が強い、努力家である。

G氏の場合

年齢：67歳 昭和9(1934)年生まれ 性別：男性 出生地：愛媛県

現況：

- ・平成8(1996)年 62歳で会社勤務を退職。東京都在住。
- ・平成11(1999)年にホームヘルパー2級資格取得。
- ・平成11年に長寿社会文化協会での地域コミュニティリーダー資格取得。

- ・平成 12(2000)年デイサービスセンターを運営するNPO法人の副理事長に就任。
- ・趣味はガーデニング、パソコン、読書。

人生経歴：生まれてから高校卒業まで愛媛県で育つ。祖父母も同居。田舎の自然に恵まれて、よく遊んだ。高校卒業後、京都の大学に入学し、昭和 33(1958)年修士課程修了。農機具メーカーに就職。1982年に東京へ転勤し、移り住む。平成 3(1991)年関連システム会社の社長に就任。平成 4(1992)年関連販売会社(神戸)の役員に就任。娘 2人が渡米留学し、その後長女が結婚し渡米したことで、アメリカの高齢者へのサービスや生活ぶりを見る機会を得る。退職前に料理教室に参加し、そこでの仲間とデイサービスセンターの運営を始める。

- 信条：
- ・幼少時代の友人は楽しい。定年になったら、故郷へ帰ろうと思っていた。
 - ・仕事は休暇もとれない状態であったが、やり甲斐があって良かった。
 - ・地域の中でできることは役立てたい。
 - ・やる以上は中途半端なことはできない。

- 考察：
- ・とても前向きである。
 - ・大学で学んだ学問や仕事で身につけた知識を今後も生かしたいと考えている。
 - ・幼少時代に地方に居たため、疎開の経験がなく、自由であったように感じられる。

H氏の場合

年齢：66歳 昭和 10(1935)年生まれ 性別：女性 出生地：東京都

- 現況：
- ・高校を中退してから、運転手や保安係、寮母などの仕事を経て、平成 9(1997)
 - ・年より障害者施設の食堂にてパートタイムで働く。
 - ・休日は、ほとんどフィットネスクラブに通っている。
 - ・平成 12(2000)年、区営住宅に入居する。お酒やドライブも好きである。

人生経歴：東京都中野区で生まれる。小学校 4年の時(昭和 18年)、集団疎開で福島へ行くが、艦砲射撃をうけ、さらに群馬へ再疎開する。妹が 2人、弟 1人いたが下の妹は知人の養女になり、2番目の妹は 22歳で亡くなる。父は在郷軍人だったが、時として家が賭博場になることもあった。中学 1年の時、母が亡くなる。祖父母が面倒をみる。家はとても貧乏で、父の仕事や中国人宅の手伝いに出されていた。高校中退後、女優の付き人や事務職に従事する。28歳の時、10年付き合い合っていた男性と結婚するが、1年で離婚。昭和 45(1970)年、35歳の時、スナックを知人と開業し、16年間続ける。昭和 61(1986)年 51歳で新宿に喫茶店を一人で開業する。B型肝炎で療養する。平成元年、保安係(神戸)の仕事につくが体調をくずし、平成 2年に銀行の寮母として働く。平成 6年、59歳の時に足をすべらせてケガをし、運動の必要性を感じ、関連企業内のフィットネスルームへ通い始める。平成 9年から障害者センターの食堂で週 4日働く。

- 信条：
- ・仕事は続けていきたい。
 - ・きちんとやらないと気がすまない。
 - ・自分ができるかどうか試してみたい。

- 考察：
- ・戦後の貧しい時代に家族を支えて、生きてきた強さを感じる。

- ・知人に対しては話し好きで、年齢関係なく丁寧である。

I 氏の場合

年齢：65 歳 昭和 11(1936)年生まれ 性別：男性 出生地：東京都

- 現状：
- ・平成 8(1996)年 60 歳 1 ヶ月で会社勤務を退職する。
 - ・レクリエーション指導者養成を受講し、その後ヘルパー 2 級の資格を取得。
 - ・平成 12(2000)年よりデイサービスセンターを運営する N P O 法人の理事長および施設長に就任する。
 - ・旅行をするのは好きであるが、とくに趣味はない。

人生経歴：3 歳から 5 歳まで上海で過ごす。小学 4 年の時、甲府へ一人で縁故疎開する。疎開先でいじめられる。戦後はかなり貧しかった。昭和 30(1955)年大学に入学、アルバイトをしていて遊ぶ暇はなかった。昭和 34(1959)年大学卒業後、金融関係に叔父の紹介で就職。28 歳の時にお見合いで結婚する。人事部 7 年、営業 7 年いた後、企画課長に就任。40 歳頃、本部の推進課長に就任。営業体制を建て直す。その後、中高年対策で設立された人材開発センター長に就任。60 歳の時、親会社上部層の儲け主義がいやになり、退職する。料理教室で知り合った仲間と「楽しく熟年を過ごす会」を作り、高齢者施設などへのボランティア活動を始める。

- 信条：
- ・子ども時代はよく覚えていない。忘れたいという気持ちが多少ある。
 - ・本人（社員）が意欲を持たなくては、企業は絶対に良くならない。
 - ・仕事でいいと思ったことは、上の者をねじ伏せてでも実施していた。
 - ・過去は問わない。

- 考察：
- ・幼少時代、疎開を経験し、その後の貧しい時代に大変苦労している。
 - ・とてもまじめである。

●まとめ

今回の報告は、対象者を 65 歳から 69 歳で実施し、それぞれの考察とこれまでの蓄積した事例とを合わせて考察をした。その共通する点は以下のようであった。

- ① 65 歳以上の高齢者は、少年期から青年期にかけての戦争体験がある。
- ② 物事に取り組む姿勢がとて真面目である。それゆえに中途半端にやめられない。
- ③ 人生を前向きにとらえている。
- ④ 温厚で他人に対して丁寧であるが、芯は強い。
- ⑤ 日本の経済成長期にたずさわって、仕事は大変であったが充実していた。
- ⑥ 男性については会社勤務退職後、地域での活動へ転換する努力をしている。

一方、69 歳以上の高齢者と 67～8 歳以下の高齢者とはその考え方において差があると感覚的に推測された。これは、人生経歴において、戦争によるものではないかと推測されるが確認されていない

また、一人一人の違いは謙著に現れ、高齢者へのレクリエーション援助の現場においてはある程度個々に対する地域性や歴史性の理解が必要であると思われる。